みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Psychology : Aboriginal Images of Trees : A Study Using the Baum Test

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 窪田, 幸子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003610

オーストラリア・アボリジニの木のイメージ
——バウムテストの人類学的考察——

窪　田　幸　子*

Ⅰ．はじめに
1．バウムテストについて
2．オーストラリア・アボリジニについて
Ⅱ．バウムテストにみられる子供の成長段階
1．基本的な発達指標
2．資料の検討
Ⅲ．バウムテストの分析
1．資料の収集
2．アボリジニの子供のバウム
3．オーストラリアの白人の子供のバウム
4．考察
Ⅳ．結論

Ⅰ．はじめに

1．バウムテストについて

バウムテスト（Baum-test）は，スイスのコッホ（Koch. C）によって1949年に発表されたおもに臨床場面でもちいられる心理テストである［コッホ　1970］。テストは「実のなる木を一本かいてください」という教示のもと，被検者の好きな木を，2B～4Bの鉛筆でA4の画用紙に描いてもらうという方法でおこなわれる。このテストによって木の空間的位置，根，冠部，幹，枝などの形や描かれ方などから，被検者のパーソナリティをある程度把握できることが経験的に知られている。

バウムテストは，TAT法（Thematic Apperception Test），ロールシャハ法などと同様な投影法心理テストの一つであるが，TAT，ロールシャハと異なり，言語を介さない描画法であること，施行が簡単であることなどがその特徴としてあげられる。描画法のテストとしては，このほかに風景構成法，HTP法（House, Tree, Person Test），家族画法など様々なものがある。しかし，バウムはそのなかでも最も施行に時間がかからず，テストの説明などにもほとんど言葉を介さない。そのため，特に人

* 大阪外国語大学

類学的な調査にはもちいやすい。

人間は成長のなかで，自分の内部に様々なイメージを蓄積してゆき，それによって個人のパーソナリティができあがる。イメージによって人は外界と対応し，他人との共通認識をもち，またその行動もイメージにより規定される。藤岡は人間はイメージタンクであると表現している [藤岡　1974]。個人のなかに蓄積されたイメージは状況に応じて様々な形で表現されるが，バウムテストによって表現されるのもこうした個人のもつイメージの一部であると考えられる。「(バウムは) 木のイメージであるとともに，イメージの統合体としてのパーソナリティーのその統合性をも反映している。いいかえれば，バウムは，それを描いた人の自己像の一種でもありうる」[藤岡・吉川　1971: 7] と考えると，バウムの調査により，パーソナリティの，ひいてはその文化のありようを知ることができると期待される。わが国では1960年代から，バウムテストが臨床場面を中心に導入され，現在でもさかんに施行されている。これまでに子供の発達にかかわるもの，精神医学にかかわるもの，犯罪心理学にかかわるものなど多岐にわたる分野で，様々な研究がおこなわれてきた（たとえば [一谷ほか　1985; コッホほか　1980])。

バウムの分析はコッホの方法にしたがえば，描線の状態，根の形状，枝の形状，葉のあるなし，実のあるなし，冠の形状，等々，バウムの個々の要素についてそれぞれ細かく検討し，同時に画用紙のなかの空間的な位置を考慮にくわえ，これらを総合的にとらえて，被検者についてのパーソナリティ診断をおこなったり，病的徴候，病型などを知る手がかりとしてもちいられる。こうした診断にはかなりの技術的，専門的な熟練を要する。これまでのバウムをめぐって子供の発達，または文化的な比較研究においては，画面のなかの空間象徴に特に注目したもの，木の冠部と幹の比率の視点から，実のあるなしを重視したもの，など各研究者によってどこかに重点をおいたかたちでの研究がおおい [深田　1959; 武田　1973; 津田　1973]。

人類学的な研究においてバウムテストをもちいる試みはこれまでにもすでにおこなわれてきた [藤岡・吉川　1971; 吉川　1978]。バウムテストを年齢層別にみてゆくと，樹型が年齢とともに発達してゆくことが知られている。その発達のしかたには文化をこえた共通性がある一方で，描かれる樹種などに文化的な違いが生じることもまたあきらかにされている。したがって，バウムテストを人類学的調査でもちいることによって，当該の文化を個々のパーソナリティの集合体としてとらえることが可能となり，さらにはその文化的な特徴と他の文化との共通性をあきらかにできると期待される。

本稿においては，バウムを枝，根，幹，冠などの各要素に分解することはせず，木

を全体としてとらえ，特に幹先端の処理の方法に着眼して類型にわけ，分析をくわえた。これはおもに藤岡らが提示した方法にしたがっている [藤岡・吉川　1971]。バウムの幹先端の処理の問題は子供の発達のなかで重要なポイントであり，くわえて臨床的に被検者ごとの個別ケースをあつかう場合と異なって，ある文化の全体としてのバウムの発達特徴を知るために有効な方法と考えたためである。

本稿の目的は，筆者が1985年から継続して調査をおこなっているアボリジニ社会の全体像の理解の一助として，バウムテストの結果からアボリジニのいだいているイメージについてその独自性と普遍性をあきらかにし，その特徴を知ろうとするものである。そのためにアボリジニの子供のバウムを収集し，これをオーストラリアの白人，および日本人と比較し，それぞれのバウムの発達過程，樹型の特徴などについて検討し，アボリジニの独自の特徴と他のグループとの共通性をあきらかにしてゆきたい。

2.　オーストラリア・アボリジニについて

アボリジニは，少なくとも4万年前にオーストラリア大陸にやってきたと考えられているオーストラリア最初の民族である。海水面が低下し，オーストラリアとアジアのあいだの島嶼部がとび島状になっていた時期に，東南アジア方面からわたってきたのであろうと推測されている。その後，海水面があがり，オーストラリア大陸が孤立するとともにかれらも孤立し，外部との接触をほとんどもたずに，大陸全体にひろがって暮らしてきた。2〜3家族程度の規模の集団で，半遊動的に獲物を追って移動を繰り返す伝統的狩猟採集の生活を，白人との本格的な接触の時点まで続けていたのである。

1788年，オーストラリアがイギリスの植民地となって以来，アボリジニの生活は急激に変化した。この時点でのアボリジニの人口は30万人ほどだったといわれているが，おおくのアボリジニが土地をおわれ，伝染病や白人との対立のなかで，アボリジニはその人口数の大半をうしなった。その後のアボリジニ保護政策によって人口は現在，増加にむかっている [小山　1988]。

現在のアボリジニたちは，白人がおもに居住する都市に暮らし西洋化した生活をおくるもの，アボリジニのマチに居住するもの，より伝統的で小規模のムラに暮らすものなどその状況は多様である。しかし白人の影響をまったくうけずに昔ながらの生活をおくるものは皆無といってよい。

このような状況のなか，アボリジニたちのあいだでは，自分たちの権利を主張する土地権運動や，儀礼の復活，マチからはなれて小規模のムラをつくり伝統的な生活へ

回帰しようとする試みなどがみられ，アボリジニたちは，白人文化に適応しながらも同化するのではなく，かれらのアイデンティティとしての新しいアボリジニ文化を模索している状況にあるということができる。

アボリジニのなかにも白人とともに都市で暮らすもの，地方の町で暮らすものもおおい。筆者が調査をおこなっているのは，比較的白人との接触の少ないアボリジニ自身の土地と認められた地域に暮らすアボリジニである。かれらは西洋の物質文化の影響をうけつつも，狩猟採集や儀礼をおこない，自然のなかに暮らしているといってよい。そうしたかれらの自然に対する認識がわれわれと異なっていることはかれらの神話や儀礼をみてもうかがい知ることができる [WARNER 1958]。また，日常生活のなかや狩猟採集の際にもそうしたかれら独特の認識が実感されることがおおい。こうした調査における筆者の実感はバウムテストにどうあらわれるのだろうか。本稿はかれらの抱く自然のイメージにバウムテストによって迫ろうとする試みである。

Ⅱ．バウムテストにみられる子供の成長段階

1．基本的な発達指標

藤岡らは，バウムテストをつうじ，バウムにみられる子供の成長段階をしめしたが，その成長段階は文化の境界をこえて共通してみられるものであった。

標準的なバウムの成長は，幼児不定型とよばれるなぐり書きでほとんど木の絵にはみえない時期をへて，5～6才の時期には幼型とよばれる木があらわれる。幼型の木とは紙の端から直接たっていること（紙縁地平），電柱状の幹，板をはりつけたような枝（直交枝），幹先が直閉であることなどを特徴とするバウムである（図1）。あらわれる年齢に若干の差はあるが，この幼型のバウムはどの文化でも共通してみられる。これは，小学校低学年になると急速に減少し，高学年になるとほとんどみられなくなる。その後，バウムは年齢があがるにつれ幼型から変化し，放散型，基本型，冠型，人型のいずれかの類型に分類される形となり，10才から11才頃には，一応の成長を遂げる（図2）。この放散型，基本型，冠型，人型という4つの類型は幹の先の処理のしかたにもとづいて分類されたものである。バウムを描くにあたって，幹の先をどう始末するかという問題が子供の発達にかかわる重要なポイントであることがあきらかであるため，こうした分類方法がとられている。

放散型（radial type）は幹先をそのままいくつかに枝別れさせて伸びているかたち

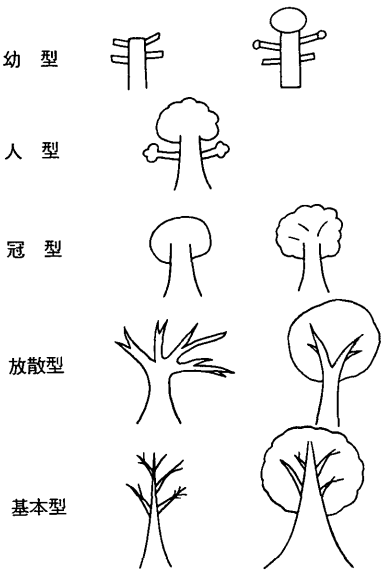


図1　バウム類型

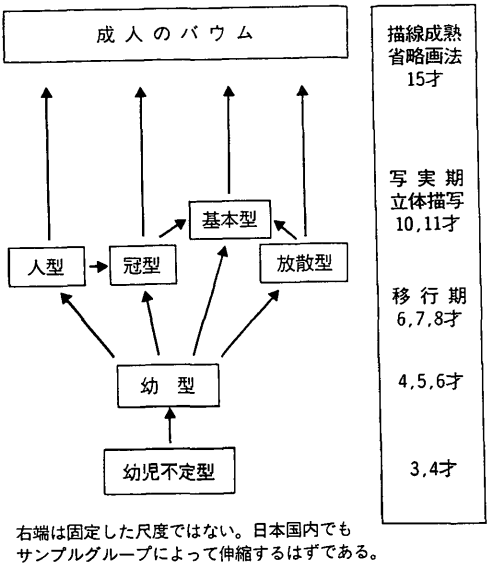


図2　バウム成長の概念図 [藤岡・吉川1971による]

をいう。二股だけにわかれている場合（Y幹）も放散型と分類する。基本型（basic type）はT幹ともよばれ，幹先がまっすぐ伸び，枝が左右に互してはえているものである。年齢があがるにつれこの型が増加することが認められるため，基本型とよぶ。冠型（crown type）は幹の先端処理を放棄して，冠の輪郭を描いたものをさす。ただし，冠の内部に枝組が描かれている場合は，その類型を優先させ，放散型または基本型とする。人型（humanoid type）は人の形のように，冠の下に手のような枝がでているものをいう。これは幼型の特徴である幹の下方の枝が少数だけ冠の下に残ってしまったものと考えられ，冠型の派生型ともいえる。

図2は，バウムの成長の図式化であるが，幼型の出現，成長とともにあらわれる4つの類型，基本型が全体のなかで年齢とともにモードとなってゆくなどの点をふくめ，こうした成長の図式は，文化にかかわりなくどこにでもみられる共通したものとされる [吉川　1978]。また，文化的な違いとしては，その幼型からの変化の時期的なずれ，描かれる木の種類があげられる。

2.　資料の検討

筆者は本稿の作成にあたって，日本人の子供の発達の分析のために，新しい資料をもちいた。A小学校が，1983～1986年の3年間にわたり，全学年から収集した2000

枚あまりの6才～12才までのバウムから，各学年ごとに男女各10枚ずつをランダムサンプリングし，120枚を選びだした。また，B幼稚園に出向き3才から6才までのバウム240枚を収集し，そのなかからランダムサンプリングをおこない，60枚を選びだした。テストはいずれも各クラスごとの集団法でおこなわれた。

合計180枚の分析をおこなった結果，いくつかの特徴が指摘できることがわかった。以下，年齢ごとにその特徴をのべてゆくことにする。

4才，5才グループともに幼型のバウムが主で，幼児不定型は5才までで消失している。6才グループになると，人型，冠型があらわれはじめる。幼型のバウムも含め，概念的な描画がおおいことが認められる。7才グループでも幼型がおおくみられるが，冠型，基本型，放散型それぞれの幼型であることがはっきり認められるようになっており，木の描画表現がはやい時期からできあがっているといえる。ただし，それらはいずれも現実の木との対応のうすい，概念的な描画といってよい。8才になると幼型の頻度がさがる。枝組や，木の表現からみて成長をとげる時点は9才といってよいだろう。10才になると幼型はみられなくなり（幼型的な要素はのこる），概念的といってよい冠型のバウムがおおいいっぽうで，立体表現，枝組などの表現に現実の木との対応がとれたものが出現するようになる。こうした傾向は11才，12才と年齢があがるにつれ顕著になる。

以上を類型・年齢別に整理したものが表1である。全体を概観すると，放散型，基本型の頻度が高い。放散型は全年齢をつうじて高率で出現している。しかし，基本型の割合は年齢とともに増加してゆき，12才では放散型を上回る率になっていることがわかる。これまでの研究に比して，本稿であつかったデータでは放散型の出現頻度が高いことが指摘される。しかし全体としては幼型から，冠型，人型，放散型，基本型

表1　バウム類型，年齢別件数－日本人

類型＼年齢	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計(件)
幼児不定型	4(20)	1(5)								5
幼　型	16(80)	19(95)	16(80)	6(30)	2(10)					59
人　型			3(15)	2(10)	2(10)	1(5)				8
放散型				2(10)	2(10)	3(15)	4(20)	3(15)	7(35)	21
冠　型			1(5)	5(25)	9(45)	13(65)	12(60)	10(50)		50
基本型				2(10)	4(20)	3(15)	4(20)	6(30)	13(65)	32
ヤシ・バナナ					1(5)					1
その他				3(15)				1(5)		4

件数（年齢集団別パーセント）

へと変わり，そのなかでもモードが基本型になってゆくという，これまでの研究でしめされた成長過程と同様の経過をたどっているといってよいだろう（付録1を参照）。

Ⅲ．バウムテストの分析

1．資料の収集

本稿であつかうオーストラリアのバウムはそれぞれの地域の小学校で1988年夏に収集したものである。

アボリジニのバウムは，オーストラリア中央部の砂漠地帯のアボリジニの町，アーナベラ Earnabella で収集した。この町はアボリジニの土地として認められた地域にあり，一般の人は許可なく立ち入ることはできない。アーナベラの町は，1937年に長老派協会のミッションタウンとして設立され，現在では政府の援助によって，アボリジニのための住宅，上下水道設備，電力設備，学校，病院，マーケットなど基本的な設備がそろっており，アボリジニたちは狩猟採集行動や儀礼などの伝統的な生活様式を残しつつ，基本的にはこの町に定住している。小学校も政府によって運営されており，白人の教師とアボリジニの補助教員によって教育がおこなわれている。バウムはこの小学校でクラスごとに集められた。3才から14才までの男女52枚である。

アーナベラでのテストについては母国語がピチャンチャジャラ語（Pitjantjatjara）であるため通訳を依頼した。この小学校では，英語とピチャンチャジャラ語の両方で教育がおこなわれているが，子供たちのほとんどはまだ英語が流暢ではない。テストに際し，特に低学年の場合，教師に通訳を依頼したが，「木」という単語の通訳が問題であった。ピチャンチャジャラ語で「木」にあたる言葉はない。"Punu"という言葉がこれに最も近い意味であるが，これは同時に材木，薪，マッチ，木でつくったものなどの意味をもつ。個別の木をあらわす言葉は多数だが，われわれのいう意味での一般名称としての「木」にあたる言葉がピチャンチャジャラ語にはない。このことはアボリジニの木についての認識のあり方がわれわれと異なっている可能性をしめしている。

白人の子供のバウムについては二つの都市で収集した。ノーザンテリトリー東北部のボーキサイト鉱山の町，ゴーブ（Gove）とニューサウスウエールズ州の州都シドニー（Sydney）の小学校である。ゴーブはアーネムランドのなかに位置し，隣接してアボリジニの町イルカラ（Yirrkala）がある。鉱山のためにアボリジニから土地を

表2　地域別被験者数

年齢(才)	アボリジニ (Eranabella)	オーストラリア白人	
		ゴーブ (Gove)	シドニー (Sydney)
4	3		
5	6	18	8
6	5	8	7
7	1	10	3
8	3	6	8
9	2	14	16
10	7	6	9
11	9	19	2
12	7	14	1
13	6	4	
14	3		
合計	52	99	54

（単位：人）

借りている町である。しかし，その小学校や，白人たちの生活のなかにはアボリジニの影はほとんどない。鉱山会社の労働者の子供がほとんどという学校はノーザンテリトリーでもっとも大規模である。一方，シドニー郊外の小学校は，下町にあり，多民族国家である現在のオーストラリアを反映するような様々な民族的背景をもった子供たちが集まっていた。混血アボリジニの子供もおおい小学校であるが，本稿であつかう資料からは混血アボリジニの例はのぞいてある。テストはいずれも各クラスごとにおこなわれた。集められた描画は5才から13才までの男女151枚である（表2）。

2.　アボリジニの子供のバウム

アーナベラで収集したアボリジニのバウムをみると，3，4才では幼児不定型で，5，6才で幼型となる。しかし幼型でも，いわゆる紙縁地平，電柱状幹，板切れ状の枝，幹先直閉といった典型的なものは少ない。7，8才になると木の表現は急に現実に近いものになり，幼型の要素は残るものの7才でも樹皮の皮目の表現，立体的な枝の表現があらわれ，写実的表現に近づいているといえる。9から11才では，表現は稚拙だが現実感のある木が増加し，概念的な木はほとんどあらわれない。12才になるとバウムは写実的で砂漠の木らしくなり，立体表現など成人のバウムに近いものとなる。

アーナベラでの木の表現は現実との対応がよく，かれらの描く木の絵は，写実的で，いきいきとしたものがおおい。8才の子供の描画でも表現は幼いなりにも，砂漠の木

表3　バウム類型，年齢別件数－アボリジニ

類型＼年齢	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	総件数
幼児不定型	3(100)		1(20)									4
幼　　型		5(83)	3(60)									8
人　　型												
放 散 型				1(100)	3(100)	2(100)	6(86)	9(100)	5(72)	6(100)	3(100)	35
冠　　型			1(20)				1(14)		1(14)			3
基 本 型												
ヤシ・バナナ												
そ の 他		1(17)							1(14)			2

件数（年齢集団別パーセント）

らしい雰囲気をよく伝えるものがおおい。さらに高学年になると，非常に巧みな写実的表現が増える。

以上の資料についてその類型別に年齢ごとの百分率をしめした（表3）。アボリジニのバウムの類型にみる発達も日本人や白人と共通して，幼児不定型から幼型へと発達してゆき，その幼型も徐々に消失してゆくことがわかる。しかしその後，あらわれるはずの人型，冠型，基本型があらわれず，ほとんど全部が放散型に集中している。小学校高学年で，モードとなるはずの基本型は，一例もみられないことが特記される。また，人型がまったくあらわれず，冠型もほとんど無視してよいほどの率でしかあらわれないこともアボリジニのバウムの特徴といってよい（付録2を参照）。

3.　オーストラリアの白人の子供のバウム

二校で集められた資料を全体として概観してみると，5，6才児のバウムは一線枝一線冠または典型的な幼型のものがほとんどをしめる。7才になると幼型のいっぽうで，人型，冠型があらわれてくる。いずれも非常に概念的な，現実の木とはかけはなれたイメージの絵といってよい。8，9才でも基本的な表現はおなじで，なかに数例，写実的といえる木らしい表現のものがまじる。10，11才になると立体的表現，現実の木と対応した表現が徐々に増加してくるが，概念的なバウムが依然としてみられる。このグループでは，10才が一応の成長をとげる年齢といってよいだろう。また，このグループでは10才から継続してヤシの木のバウムがあらわれることが特徴的である。12才になると，バウムは全体的に写実的または成人省略画的になり，いわゆる概念的な冠型のバウムはほとんどみられなくなる。

オーストラリアの白人の子供のバウムでは，幼型は9才頃まで出現する。冠型の頻

表4　バウム類型，年齢別件数－オーストラリア白人

類型＼年齢	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	総件数
幼児不定型		1(4)									1
幼　　型		17(65)	8(53)	4(31)	2(14)	2(7)					33
人　　型			1(7)	1(8)	1(7)	3(10)		1(5)			7
放　散　型		3(12)	2(13)	1(8)	5(36)	15(50)	12(80)	9(43)	10(67)	3(75)	60
冠　　型			4(27)	7(54)	6(43)	4(13)		3(14)	3(20)		27
基　本　型						1(3)		2(10)			3
ヤシ・バナナ						1(3)	3(20)	6(29)	2(13)	1(25)	13
そ　の　他		5(19)				4(13)					9

件数（年齢集団別パーセント）

度が高く，人型も出現しており，概念的な描画がおおいといってよい。放散型の頻度がもっとも高く，年齢とともに比率が増加しており，モードとなっていることがこのグループの特徴である。基本型は9才と11才でほんのわずかみられるだけである（表4）（付録3を参照）。

日本人の子供のバウムの発達と比較して考えると，幼型から人型，冠型，放散型，基本型のいずれかへと発達してゆくという基本的なバウムの成長過程はおなじであるといえる。幼型がみられなくなる年齢，発達をとげる年齢も共通している。また，人型，冠型という概念的なバウムが出現していることも共通した特徴といってよい。しかし，基本型がほとんどみられないことは大きな違いとして指摘できる。これは藤岡らの論文でしめされた発達段階で，バウムが成長するにつれ基本型が増え，モードとなるというという「文化の違いをこえて共通したバウムの発達」が，オーストラリアの白人にはあてはまらないことをしめしている。

4. 考　　察

アボリジニと白人のバウムの分析からつぎの三点が指摘できる。

(1)　アボリジニ，白人ともにほとんど基本型があらわれず，放散型への集中が著しい。特にアボリジニでその傾向が顕著である。

(2)　アボリジニでは人型がまったくみられず，冠型もほとんど出現しない。

(3)　アボリジニでは幼型の消失時期がはやい。

第一点の基本型がほとんど出現せず，放散型がアボリジニと白人の両グループで

モードとなっていることは興味深い。放散型の割合は白人グループの11，12才で約40%，アボリジニでは7才以上では70%以上である。

基本型，放散型など各々の類型の意味づけについては，まだはっきりとしたものは発表されていない。しかし，これまでの調査により，日本だけではなく，年齢とともに基本型が増え，この類型のバウムがモードになってくることが知られている。

オーストラリアで基本型がほとんどあらわれない理由として，その生態系の特徴ということも可能性も考えられる。しかし，オーストラリアに基本型をとる木が特に少ないということはいえない[1]。またもう一つのポイントとして，日本人のバウムの類型のなかで，10年前と今回の調査を比べると，基本型のしめる割合が若干少なくなり，放散型がおおくみられるようになっているという点があげられる。今回のデータでは基本型は11才で47%，12才で65%をしめるようになる一方，放散型も11才で53%，12才で35%である。

こうしたことから考えると，『基本型は「おとな」として社会で，あるひとつの道筋を決めたことをしめし，一方放散型はまだどこへゆくか定まらない，いいかえれば多様な可能性を秘めた状態をあらわしている』という仮説を考えることができる。放散型を「モラトリアム型」とよぶことができるかも知れないという意見もある[2]。そのように考えれば，アボリジニにみられる放散型への過度の集中は，彼らの社会での大人としてのあり方がひとつではなく，ゆるやかであるという仮定も可能であろう。

次に，第二点の冠型，人型が白人には日本人とほぼ同様にみられ，アボリジニにはみられないということについて考えてみよう。この2つの類型は両方ともが非常に概念的な木の表現といってよい。日本人と白人オーストラリア人という都会で自然に接することが少ない子供たちのおおくがこうした冠型に代表されるような様式的な，写実からはなれた木のイメージをもっていると考えることができる。

それに比して，アボリジニのグループでは冠型，人型はほとんどみられなかった。かれらの描画には実際にかれらの身の回りにある木を意識して描いたものだとわかる描画が技術の稚拙さと関係なくおおくみられた。アボリジニの子供が日本人や白人に比べて，自然をより身近に感じていることは確かである。それは砂漠の子供たちの自由画にも表われていた [窪田　1988]。アボリジニの生活のなかで自然についての知識が重要視されることも子供の木のイメージに影響をあたえている可能性も考えられる。かれらは抽象的な「木」のイメージではなく，実際の木に対応したイメージをも

1）現地での観察，樹木図鑑等の書籍類のいずれによってもオーストラリアに分布する木が基本型または放散型のいずれかに片寄っていることは認められなかった[林ほか　1980; Brook 1988]。

2）藤岡喜愛氏からの私信：1989年。

っていると考えられる。かれらの言葉に，個々の木についての名称が多数あるにもかかわらず，全体的な一般名詞としての「木」が欠如していることも，かれらの木のイメージが個別的な現実との対応のあるものであることをうらづけている。

第三点として幼型の消失期が，アボリジニの場合はやいということも，アボリジニの子供たちの環境に対する認識がはやく育つことをあらわしている。描画の表現は稚拙であっても，7才ぐらいになると，現実の木との対応のついたバウムを描き始める。このことはアボリジニとかれらをとりまく環境との相互関係の深さをしめしているといってよいだろう。

もう一つ，幼型がはやく消失する理由として，アボリジニ社会での子供の位置という問題がある。アボリジニの社会では，赤ん坊のあいだは非常に甘やかされ，大家族のなかで多数の大人たちからちやほやされ続ける。しかし，自分で動き回れる年齢になると，子供たちは基本的にほったらかしにされるようになる [HAMILTON 1981]。子供たちは同年齢集団のなかで行動することがおおくなるし，食べ物や寝るところもどこかにもぐりこみ，自分たちの力で獲得する。親が子供のための食べ物をわざわざ用意してやるとか，残しておいてやることはほとんどない。また，男子では10前後には成人儀礼がはじまる。女子にははっきりした成人儀礼はないが，大人の世界に入ってゆく時期は非常にはやい。初産年齢は平均して低く，12，13才の出産もまれではない[3]。こうした社会的な事情によってアボリジニの子供たちははやく大人になることをもとめられ，それがかれらのイメージにも影響をあたえているという可能性も考えられるのである。

Ⅳ．結　　論

バウムの発達が，幼児不定型から幼型になり，年齢とともにそれが消失し，やがて立体的な表現をともなう写実的なバウムとなるという経過をたどることは，本文でとりあげたどのグループでも認められた。これまでの研究によって提出されていた，バウムのたどる発達経過は文化の違いをこえて共通するという仮説はここでも検証された。

しかし類型に目を転ずると，幼型が消失したあとにあらわれる人型，冠型，放散型，基本型のなかで，基本型がモードになってゆくという点についてはオーストラリアで

3）アーネムランドのアボリジニのタウンシップであるガリウィンクの保健所の出産記録（1985年度）には，1930年から1970年生まれの女性248人が登録されていた。それによると平均初産年齢は17.7才であり，そのうち15才以下で初産をした者は47人，全体の19%をしめていた。

は認められなかった。特にアボリジニの場合，基本型だけではなく，冠型，人型もほとんどあらわれず，13才以降では放散型に100パーセントが集中している。オーストラリア白人のグループにおいては，冠型，人型は対照群である日本人グループとほぼ同様にあらわれているといってよいが，基本型はほとんどあらわれず，放散型に集中しているということがわかった。

放散型への集中はこれまでのところ，オーストラリアに独特の現象といってよい。放散型の意味については，前章でも述べたとおり，まだはっきりとした定義はない。放散型は，基本型に比べて自由度のある，もしくはまだ模索中の状態をあらわしたバウムである，という先に提示した仮説も今後の検討を要するところである。

日本人や白人のグループとくらべてアボリジニのバウムには，冠型，人型がほとんどあらわれないことがわかった。その反対に非常に写実的な，いきいきとした表現がおおい。これはオーストラリアの白人の影響をうけない，かれらの独自な面があらわれていると考えられる。吉川氏の収集したサバのバウムのなかでも原住民系のバウムはよりいきいきとした写実的なものであり，それにくらべるとサバの他のグループや日本人のバウムは概念的であることが指摘されている [藤岡・吉川　1971: 9]。都市に暮らすものにくらべて，自然のおおい環境のなかにいればおのずと木をよくみることになる，ということも一つの理由としては考えられる。

それにくわえてアボリジニの場合，各々の自然現象に対して親和的な知識と感じ方をしている。また，かれらの日常生活のなかで自然に対する実際的な知識は重要で，植物に関していえば，薬品になるもの，道具になるもの，食べられるものなど幼い頃からその知識はしっかりとかれらのなかにたくわえられてゆく。アボリジニたちは個々の木をそれぞれ認識している。かれらが林のなかを行くとき，車で走るとき，われわれには見分けのつかない木々を明確に見分け，道しるべとするのである。今回のバウムテストの結果はこうしたアボリジニの自然に対するかかわりかた，認識のあり方の特徴をあらわしているといってよいであろう。

本論ではアボリジニの子供のバウムを，発達という観点から，日本人，オーストラリア白人と比較，考察をおこなってきたわけだが，そこに浮かび上がってきたのは，アボリジニ社会における子供時代の特性であった。つまり，幼型の消失時期のはやさ，放散型への集中，というアボリジニにみられる二つの大きな特徴は，アボリジニの子供たちがはやい時期に幼児期を抜け出すことを期待されているのと同時に，大人としてのあり方にある程度の自由度があるという，アボリジニ社会の特徴をしめしていると考えられるのである。

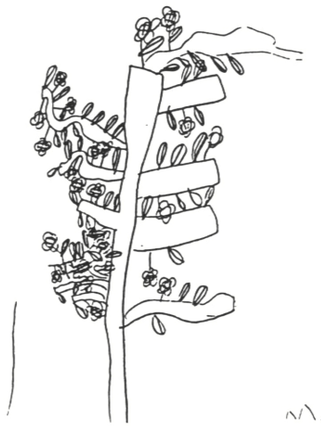
付　記

この報告は次にあげる文部省科学研究費補助金による海外学術調査の成果の一部である。1988年度「オーストラリア・アボリジニの都市集住とアイデンティティ」，1990年～92年度（継続中）「オーストラリア・アボリジニに関する民族学資料の比較分析的研究」（いずれも代表者は国立民族学博物館助教授松山利夫氏）。

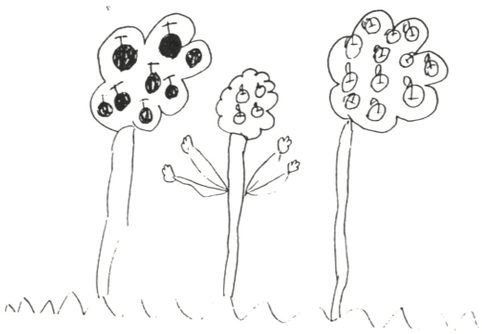
文　　献

BROOK, J.
1988 *Top End Native Plants*. Darwin: John Brook.
HAMILTON, A.
1981 *Nature and nurture: Child rearing in North-central Arnhem Land*. Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies.
林　弥栄，古里和夫，中村恒雄（監修）
1980 『原色樹林大図鑑』北隆館。
藤岡喜愛
1974 『イメージと人間 —精神人類学の視野』NHK ブックス，日本放送出版協会。
藤岡喜愛・吉川公雄
1971 「人類学的にみた，バウムによるイメージの表現」『季刊人類学』2(3): 3–28。
深田尚彦
1959 「学童の樹木描画の発達的研究」『心理学研究』30(2): 29–33。
一谷　彊・林　勝造・国吉政一（編著）
1985 『バウムテストの基礎的研究』風間書房。
小山修三
1988 「オーストラリア・アボリジニ社会再編成の人口論的考察」『国立民族学博物館研究報告』13(1): 37–68。
コッホ，C.
1970 『バウム・テスト－樹木画による人格診断法』林勝造他訳　日本文化科学社。
コッホ，R. ・林勝造他（編著）
1980 『バウム・テスト事例解釈法』日本文化科学社。
窪田　幸子
1988 「文化としての風景—オーストラリア・アボリジニの風景画」『季刊人類学』19(3): 3–47。
武田由美子
1973 「樹木画の発達段階について－実例からみた錯画期・図式期・写実期の現われ方」林・市谷編著『バウムテストの臨床的研究』日本文化科学社。
津田浩一
1973 「樹木画の発達指標の量的検討」林・市谷編著『バウムテストの臨床的研究』日本文化科学社。
吉川公雄
1978 『人間生態学－生物としての認識からの出発』東海大学出版会。
WARNER, W.L.
1958 *Black Civilization*. (rev.ed.), New York: Harper.

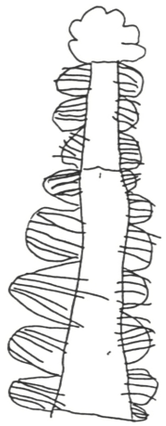
5才女子



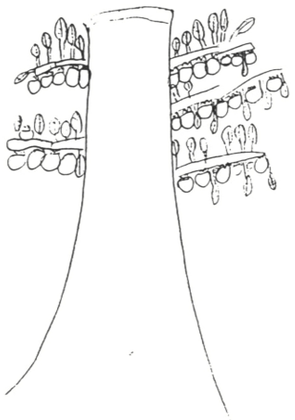
5才男子



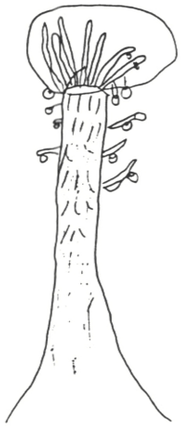
6才女子



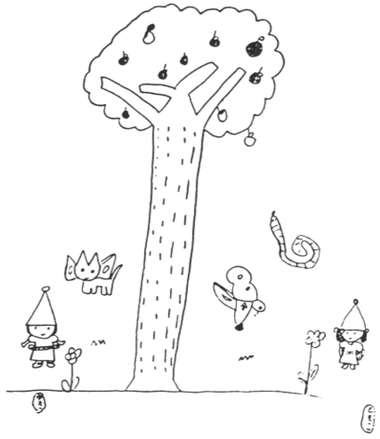
6才男子



7才女子

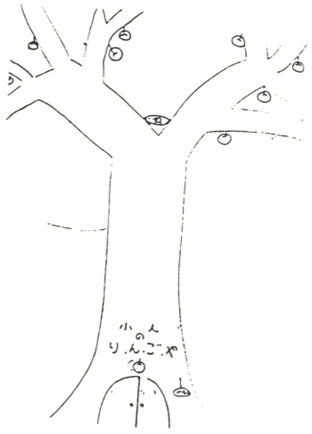


7才男子



8才女子

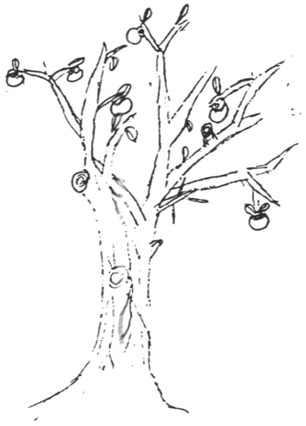
8才男子



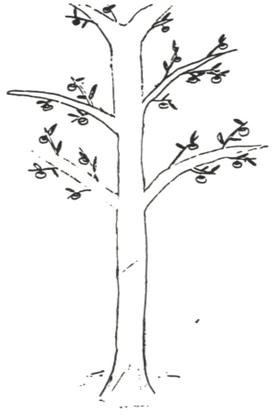
9才女子

9才男子

10才女子

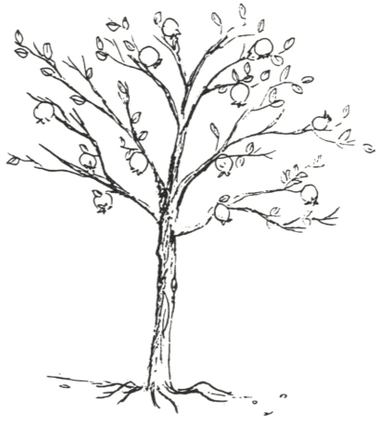


10才男子

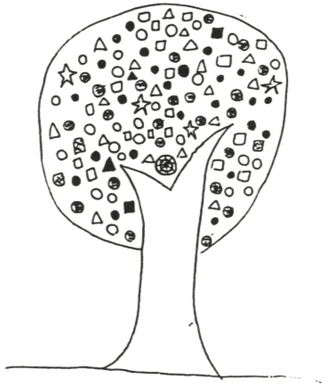


11才女子

11才男子



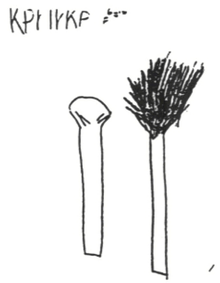
12才女子



12才男子

5 才女子

5 才男子

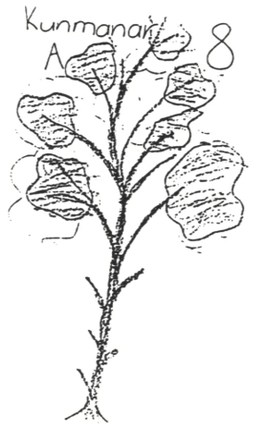


6 才女子

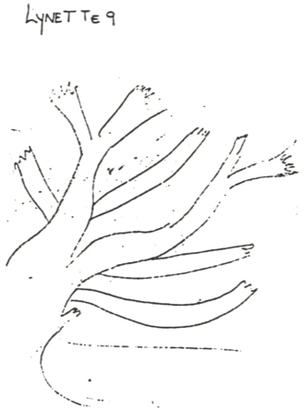
6 才男子

7 才男子

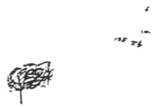
8 才女子



8 才女子



9 才女子



10才女子

10才男子

11才女子

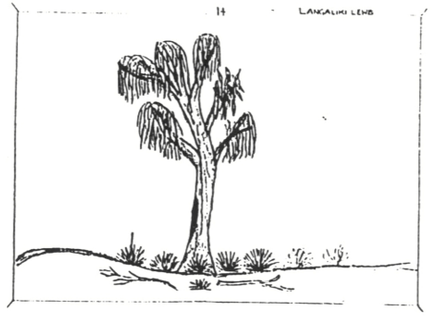
11才男子

12才女子

12才男子

13才女子

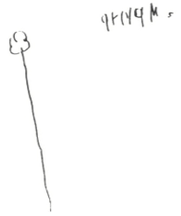
13才男子



14才女子

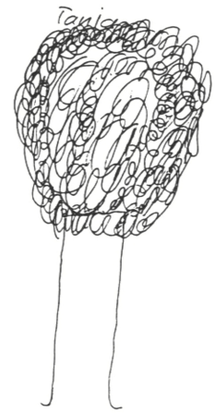
14才男子

5才女子



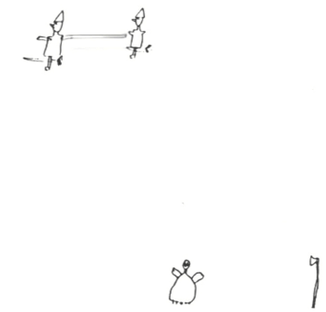
5才女子

6才男子



7才女子

7才男子

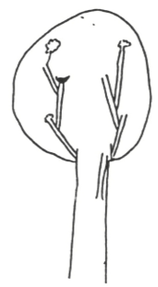


7才男子

8才女子

8才男子

9才女子



9才男子

10才女子

10才男子

11才女子

11才男子

12才女子

12才男子